文部省著作

尋常小學讀本

巻

發行所 同

K1
Mo

国立国語研究所
72423
図書館

文部省著作

尋常小學讀本

四

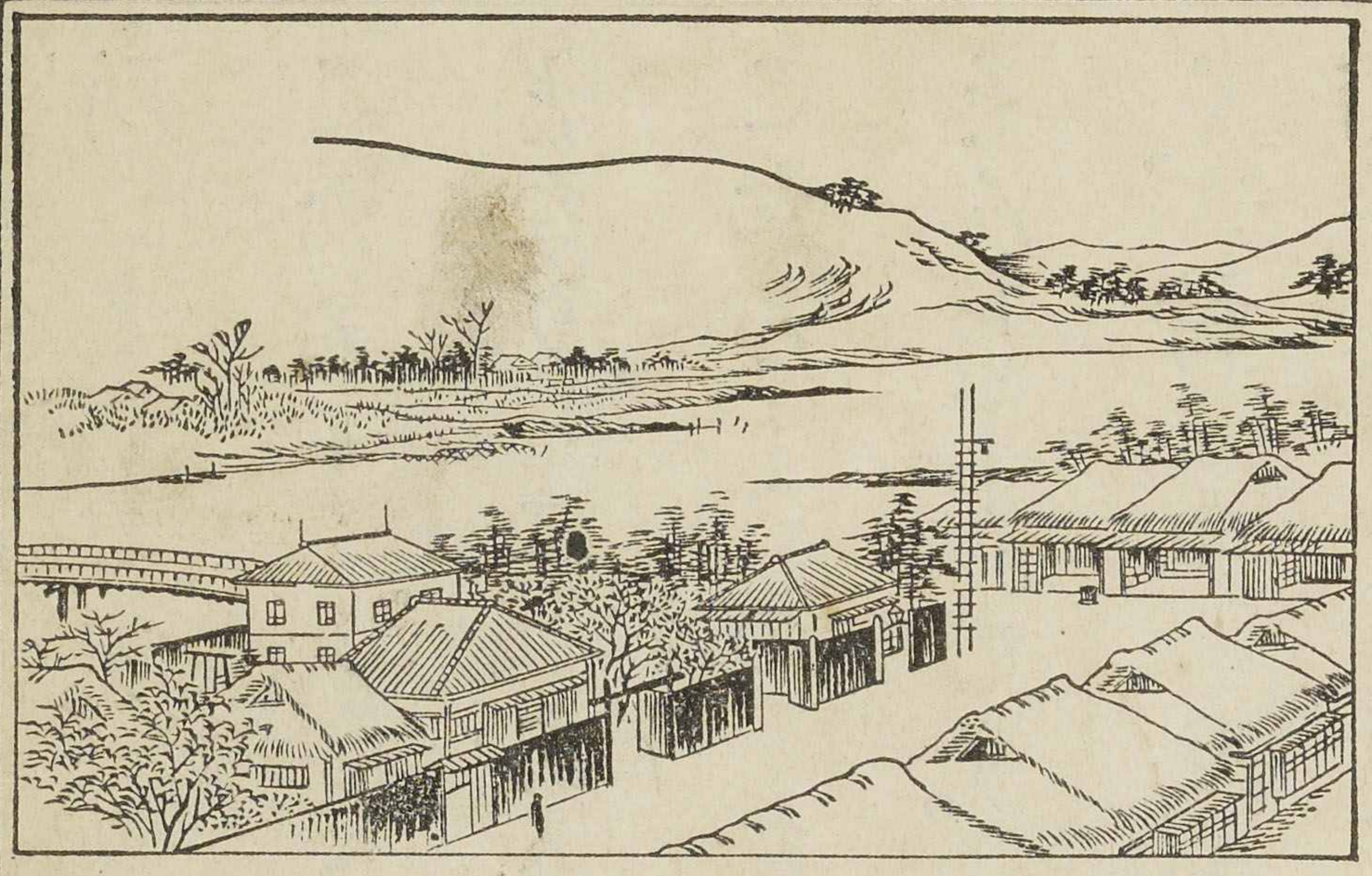
文部省
圖書檢定許可證

發行所
日本書籍株式會社

もくろく。

だい一　こたろーのむら。……一
ダイ二　ウマトウシ。……四
だい三　富士山。……七
だい四　天長節。……十
ダイ五　東京。(一)……十四
ダイ六　東京。(二)……十八
だい七　ほーねんまつり。……二十一
だい八　がん。……二十五
だい九　ねこのめ。……三十
だい十　そーじ。……三十四
だい十一　かどまつのはなし。……三十六
ダイ十二　マツノハナシ。(一)……三十九
ダイ十三　マツノハナシ。(二)……四十二
だい十四　ゆき。……四十七
だい十五　紀元節。……五十一
だい十六　てがみ。(一)……五十四
だい十七　てがみ。(二)……五十七
ダイ十八　神功皇后。……六十
ダイ十九　奈良ノ大佛。……六十四
だい二十　さる。……六十七

百村



だい一　こたろーのむら。

こたろーの村には、いへが、百五十けんほど、あります。

そのうちに、かはらやねのいへが、三げん、あり〃ます。

一けんは村役場(むらやくば)で、あとは學校(がっこー)と、巡査(じゅんさ)の駐在(ちゅーざい)〃

所(しょ)とです。

こたろーのうちは、村役場(むらやくば)の、すぐ、となりに、あります。

こたろーのおとうさんはこの村のそんちょー(こー)です。たいそー、よい人で、よく、村のせわをしたり、ときどき、學校(がっこー)へ、みに、いったりします。

學校(がっこー)のせんせいは、たいそー、しんせつ

な　人　で、ていねいに、せいと　を　をしへ
ます。
また、巡査（じゅんさ）も、たいそー、しんせつな　人
で、ときどき、みまはります。そして、ぬすび
との　はいらん　よーに、また、かじ　や
はやりやまひなど　の　ない　よーに、き　を
つけます。
それですから、どの　家　でも、あんしんして、

ねたり、おきたり、はたらいたりすることが できます。

かういふ 村に、ねる こたろーらは あはせ ではありませんか。

ダイ二 ウマト ウシ。

コタローノ ウチニハ、ウマガカッテ アリマス。

ソノ ウマハ、タイソー、アシガタッシャ

車

デスカラ、人ヲノセテ、ハヤク、ハシリマス。マタ、チカラガツヨウゴザイマスカラ、ニモツヲハコンダリ、車ヲヒイタリスルコトモデキマス。

コタローハ、アサバン、コノウマニマグサヲヤリマス。ソレデスカラ、ウマハヨク、コタローノイフコトヲキキマス。

牛　　力

マタ、トナリノウチニハ、牛ガカッテアリマス。ソノ牛ニハ、ナガイ、マガッテアルツノガアリマス。

ソノ牛ハ、タイソー、力ガツヨウゴザイマスカラ、オモイニモツヲハコンダリ、車ヲヒイタリシマス。

コタローハ、ビョーキノトキ、ソノ牛チチヲ、モラッテ、ノミマシタ。

田

牛ノ チチト ニクト ハ、タイソー、
ヨージョー ニ ナル モノ デス。
人ガ、田 ニ、デテ、イネ ヲ ウエル トキ
ヤ、イネ ヲ カリイレル トキナド ニハ、
コタロー ノ ウチ ノ ウマ モ、トナリ
ノ ウチ ノ 牛 モ、田 ニ、デテ、
ヨク、ハタラキマス。

だい三 富士山(ふじさん)。

富士山（ふじさん）といふ山は、たいそー、かっこーが よくて、ちょーど、すりばちをさかさまにしたよー です。また、たいそーし、たかくて、日本（にっぽん）では、二ばんめの高い山です。

この山の上のほーは、たいそー、さむくて、なつでも、ゆきがあります。

また、いちばん、上には、大きな穴が

ありまず。むかしは、そこから、けむりがでてゐました。

文吉(ぶんきち)は、このはなしを、學校(がっこう)で、せんせいにききました。それで、うちに、かへってきて、にはに、土をもって、山をこしらへました。そして、いちばん、上に、穴を

こしらへて、また、上のほーに、白いすなをふりかけました。

文吉（ぶんきち）のおとうさんは、これをみて、

「おー。りっぱな富士山（ふじさん）ができた。」

といって、ほめました。

だい四　天長節（てんちょーせつ）。

十一月（がつ）三日（か）は天長節（てんちょーせつ）です。この日は　てんのーへいかのお生れになった、お

めでたい　日　です。

それですから、この　日　は、どこ　の　家

でも、こっき　を　だして、おいはひ　を　し

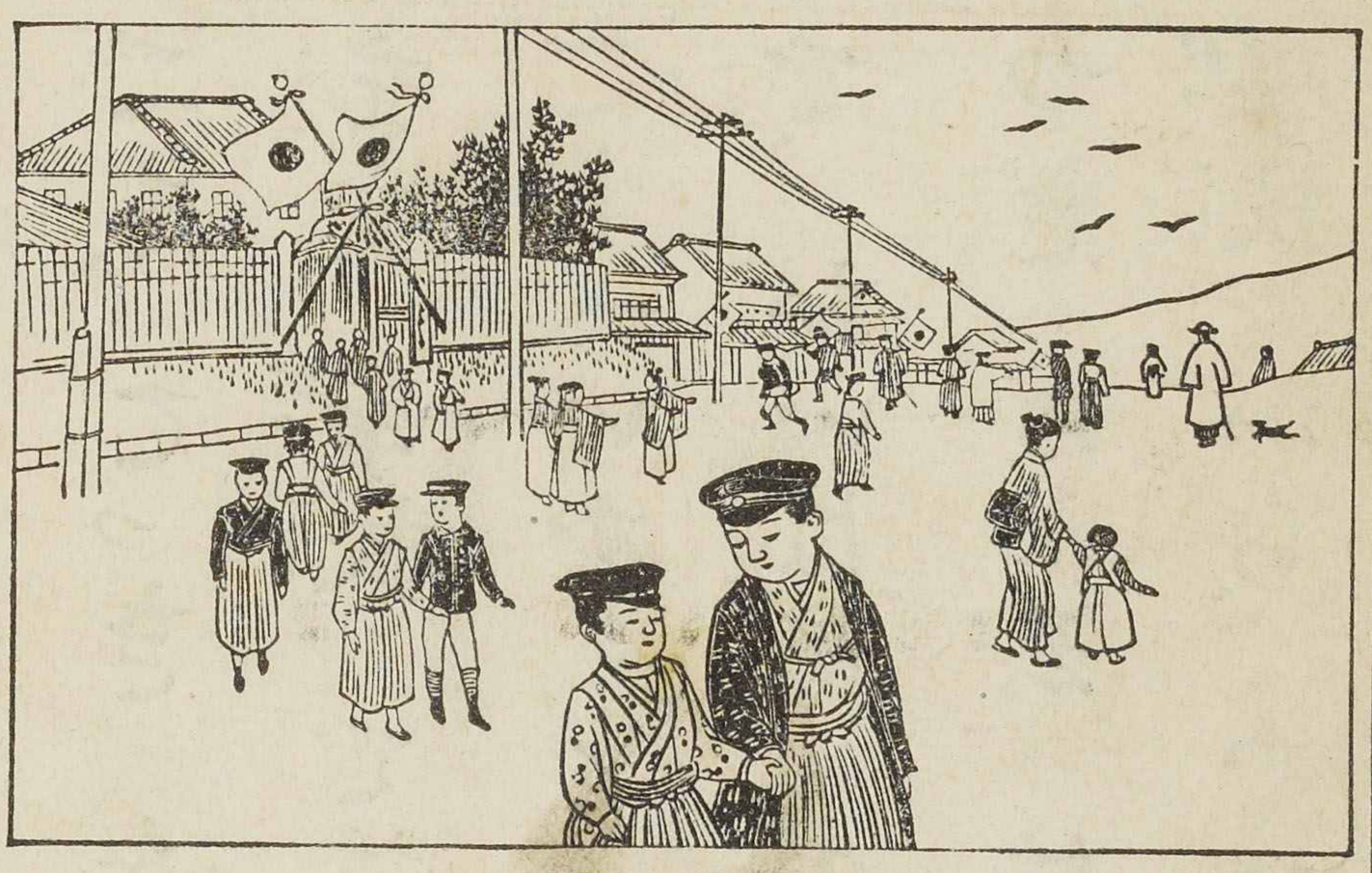
ます。學校　では、てんのーへいか　と　こー

ごーへいか　と　の　おしゃしん　を　がん

で、おいはひ　の　しょーか　を　うたひます。

つぎ　の　ゑ　は、天長節　に、せいと　が、

學校　から、かへってくる　ところ　です。て



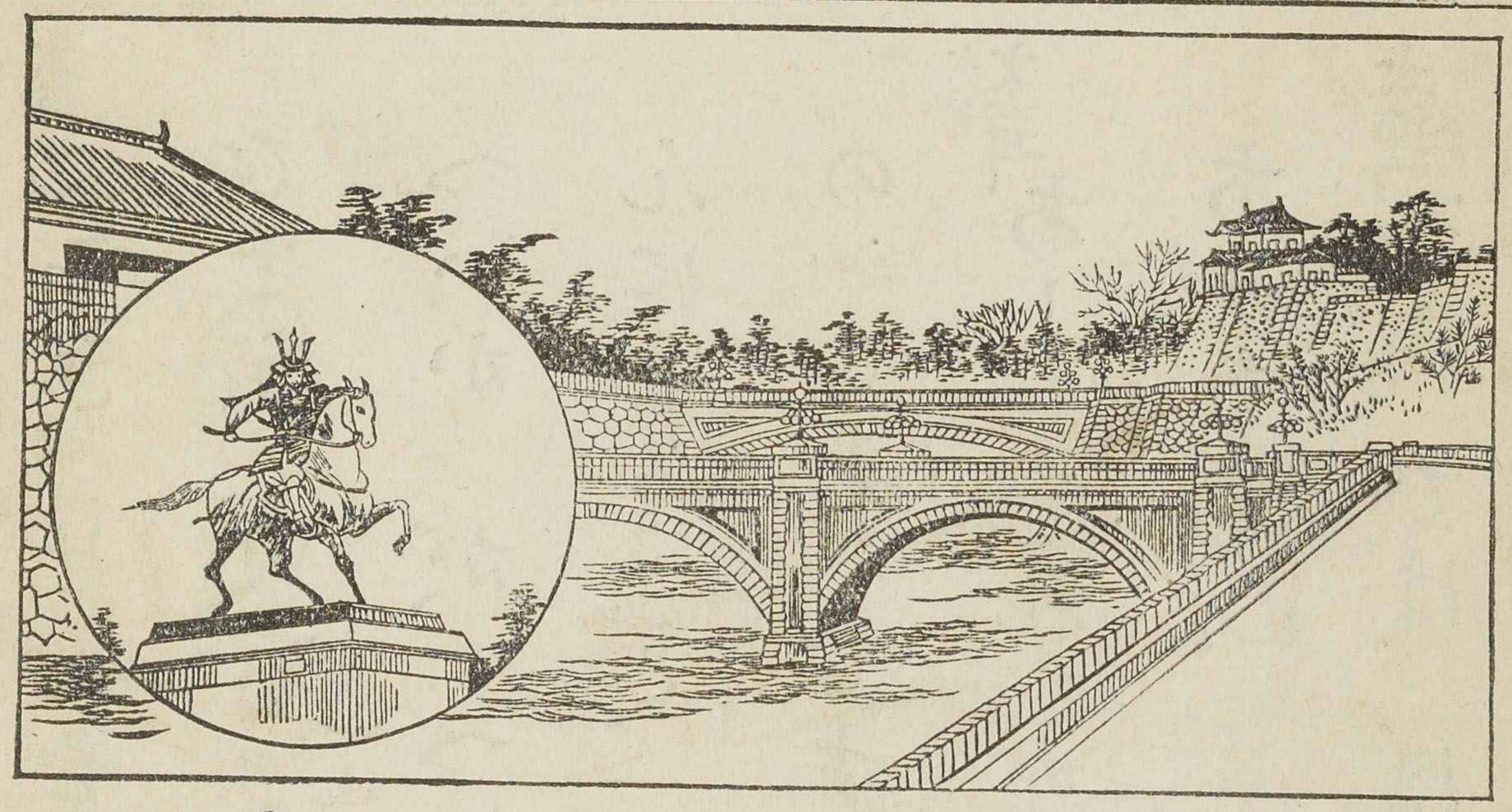
をひいて、はなしをして、くるのは太郎と文吉(ぶんきち)とです。

太郎「文吉(ぶんきち)さん。きみはかんぺいしきのゑをみたことがありますか。」

文吉「かんぺいしきのことといふのはなんのことですか。」

太郎「さっき、せんせいが おはなしなされた」
でせう。『東京(とーきょー)では、天長節(てんちょーせつ)に、てんのー」
ついかが、へいたいを あつめて、ごら」
んになる。』と、おはなしなされたでせう。あ」
のことです。」
文吉(ぶんきち)「あー。それならまだ、みたことが
ありません。」
太郎「それでは、ぼくのうちに、おいで」

日本

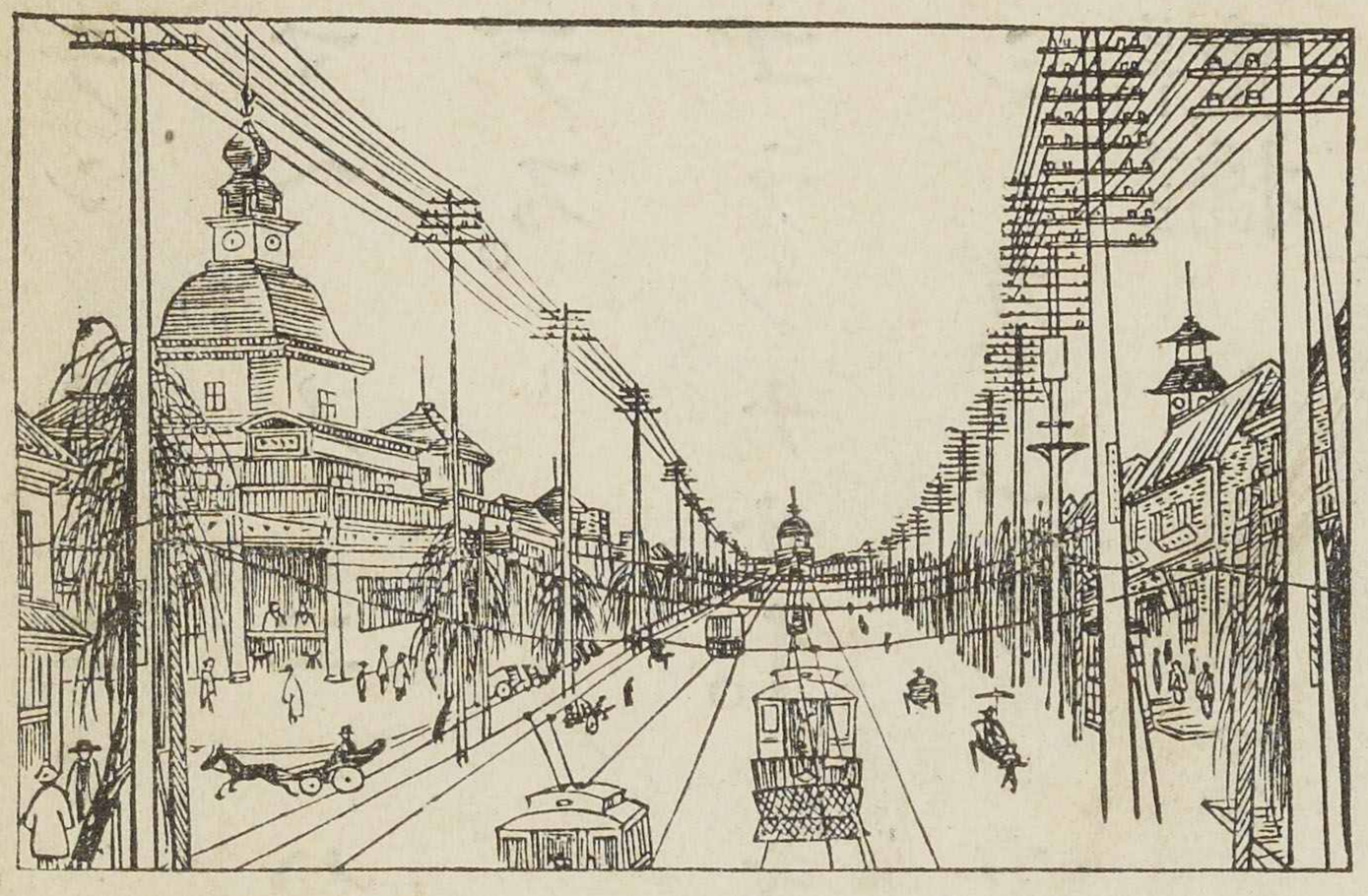


なさい。みせてあげませう」。

ダイ五　東京（トーキョー）。（一）

東京（トーキョー）ハ　キュージョーノ　アル　トコロ　デ、日本　デ、イチバン、ニギヤカナ　トコロ　デス。キュージョート　イフノハ　テンノーヘイカノ　オスマヒニナル　ゴ

テン ノ コト デス。
マヘ ノ ヱ ハ ソノ キュージョー ノ ヱ
デス。
ゴランナサイ。キュージョー ノ マヘ ニ、ハ
シ ガ、ニッ、カケテアリマス。アレ ハ ニ
重橋（ヂューバシ） ト イフ ハシ デス。
二重橋（ニヂューバシ） ノ キンジョ ニハ、楠木正成（クスノキマサシゲ） ト イ
フ 人 ノ ドーヅー ガ アリマス。ヒダリ



ニ、アルノハ
デス。正成（マサシゲ）ハ、
ソノドーゾーノエ
ムカシ、テンノーノオタ
メニ、ハタライタ、エライ
人デス。
東京（トーキョー）ニハ、マタ、銀座通（ギンザドホリ）ト
イフ、ニギヤカナトホリガ
アリマス。コノヱハソノ
トホリノヱデス。

店

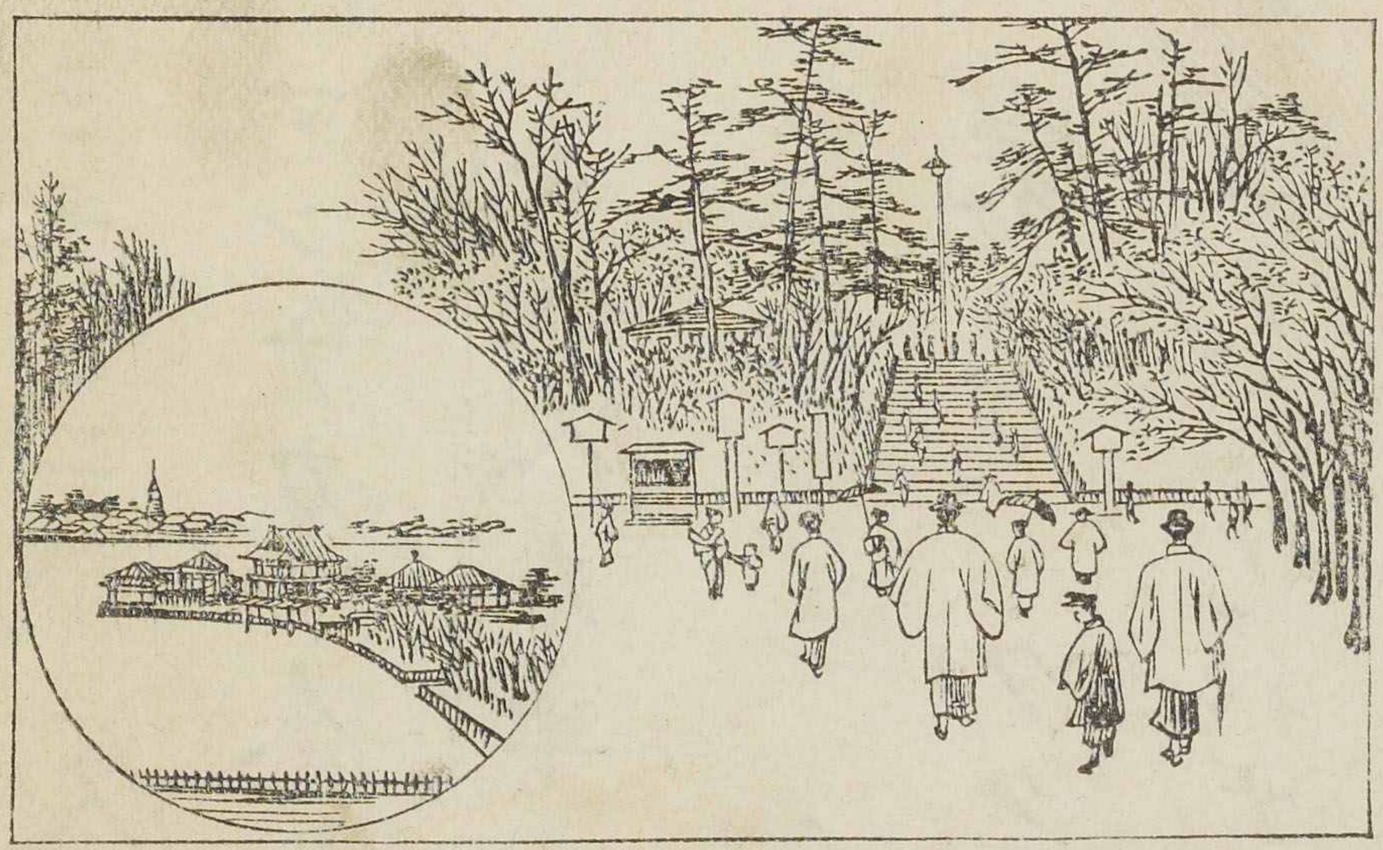
ゴランナサイ。リョーカハノミチニハ、人ガ、オホゼイ、アルイテヰテ、マンナカノ、ヒロイミチニハ、デンシャヤ人力車（ジンリキシャ）ガトホッテヰマス。

マタ、リョーカハニ、リッパナ家ガ、タクサン、ナランデタッテヰマス。コノ、リッパナ家ハ、ミンナ、イロイロナモノヲウッテヰテ、店ガ、タイソー、キレイデス。

ダイ六　東京（トーキョー）。（二）

東京（トーキョー）ニハ、マタ、上野（ウヘノ）トイフトコロガアリマス。コノ、下ノヱハソノ上野（ウヘノ）ノヱデス。

上野（ウヘノ）ニハ、イロイロ、メヅラシイモノノアツメテアルタテモノヤ、イロイロ、メヅ



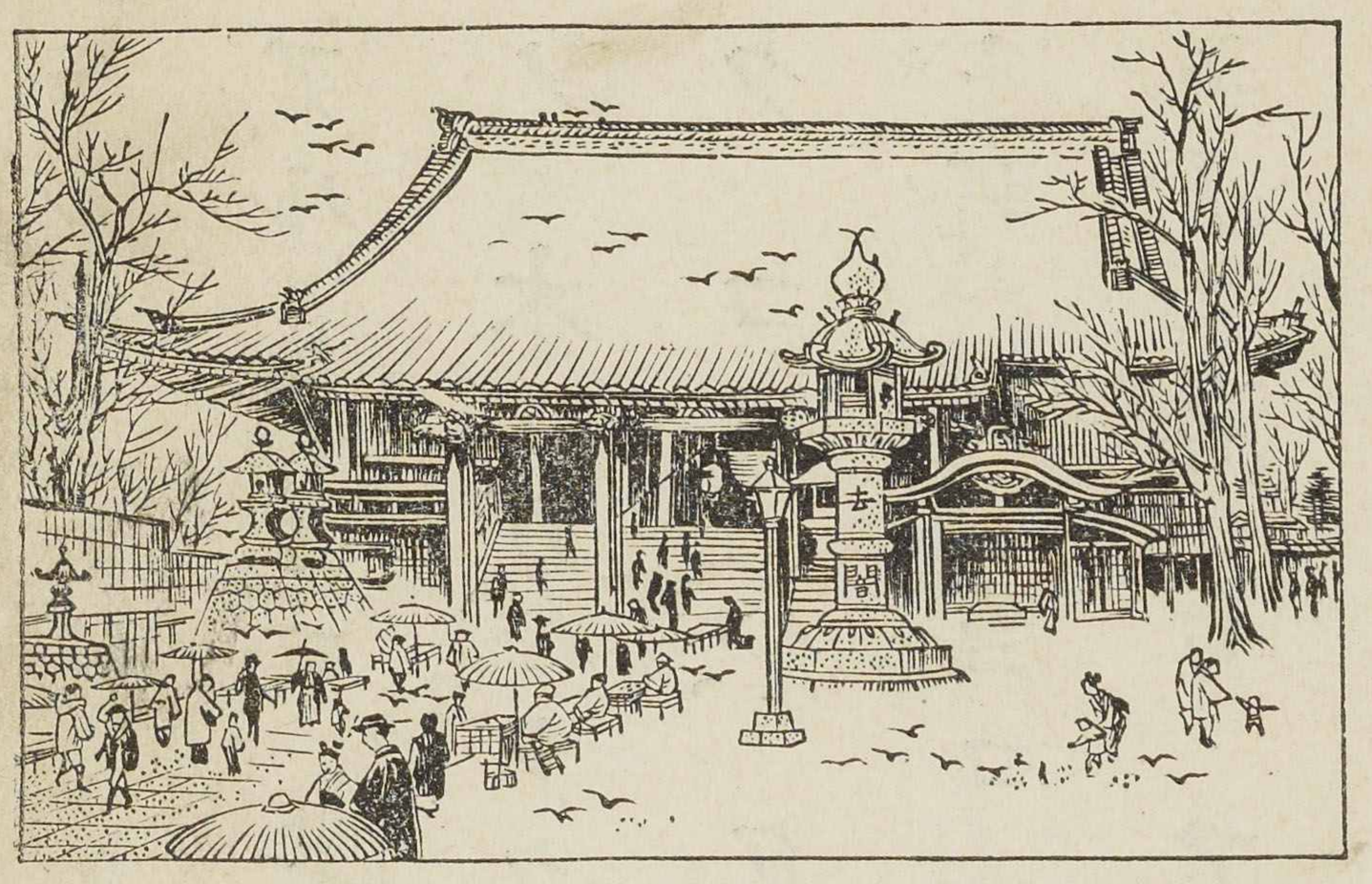
池

ラシイトリヤ、ケモノナドノカッテ〃アルトコロモアリマス。マタ、サクラノ木ガ、タクサン、アッテ、ハナノサ〃クコロハ、タイソー、ニギヤカデス。

上野(ウヘ)ノヨコニハ、不忍池(シノバズノイケ)トイフ、大〃キナ池ガアリマス。マヘノヱノヒダリニ、ミエルノハソノ池デス」。

東京(トーキョー)ニハ、マタ、淺草(アサクサ)トイフトコロ

寺



ガ アリマス。

リッパナ オ寺 ガ アリマス。 コノ ヱハ

ソノ オ寺 ノ ヱデス。

ゴランナサイ。トリガ、タクサン、トンデヰマス。アレハ

ハト デス。

浅草寺二ハ、浅草寺トイフ、

浅草ノ キンジョ二ハ、隅田川ト イフ川ガ アリ〃

マス。川ノドテニハ、サクラノ木ガ、タクサン、ナランデヰテ、花ノサクコロハ、ココモ、タイソー、ニギヤカデス。

だいセ　ほーねんまつり。

つぎの　ゐ　は　おちよの　村　の　お宮です。お宮　の　まへ　には、人　が、おほぜい、こみあってゐて、たいそー、にぎやかで

す。

ことしは、あめも、よいかげんに、ふって、てんきもつづいて、おこめが、たくさん、とれました。

それです。よろこんで、ほーねんまつりをしてゐるのです。

ほーねんまつりといふのは、お米が、

たくさん、とれたのをいはって、おまつりのことです。

ごらんなさい。女の子が、おかあさんにてをひかれて、いきます。あれはおちゃよです。

ことしは、お米が、たくさん、とれた。

それをいはって、

ほーねんまつり。」

村の わかいもの、

としより、こども、

みんな、そろって、

お宮に、まゐる。

お宮の こちらで、

どんどん、どどん。

お宮の あちらで、

まふ（もし）

月

わいわい、わー。」

こちらは おかぐら、

あちらは すまふ。

「はやく、いかう。」と、

いそいで、まねる。」

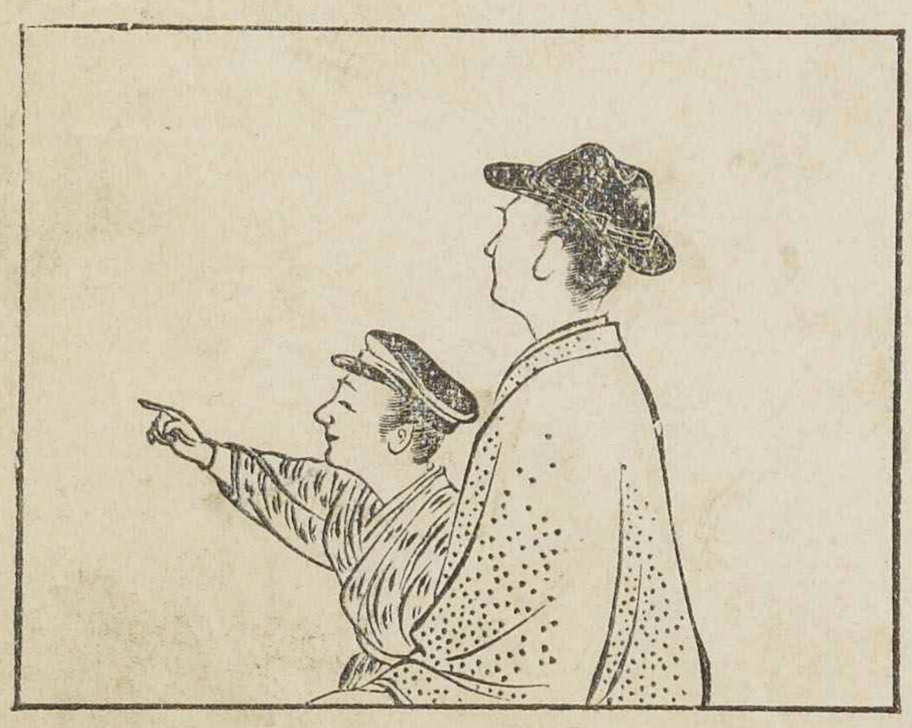
だいハがん。

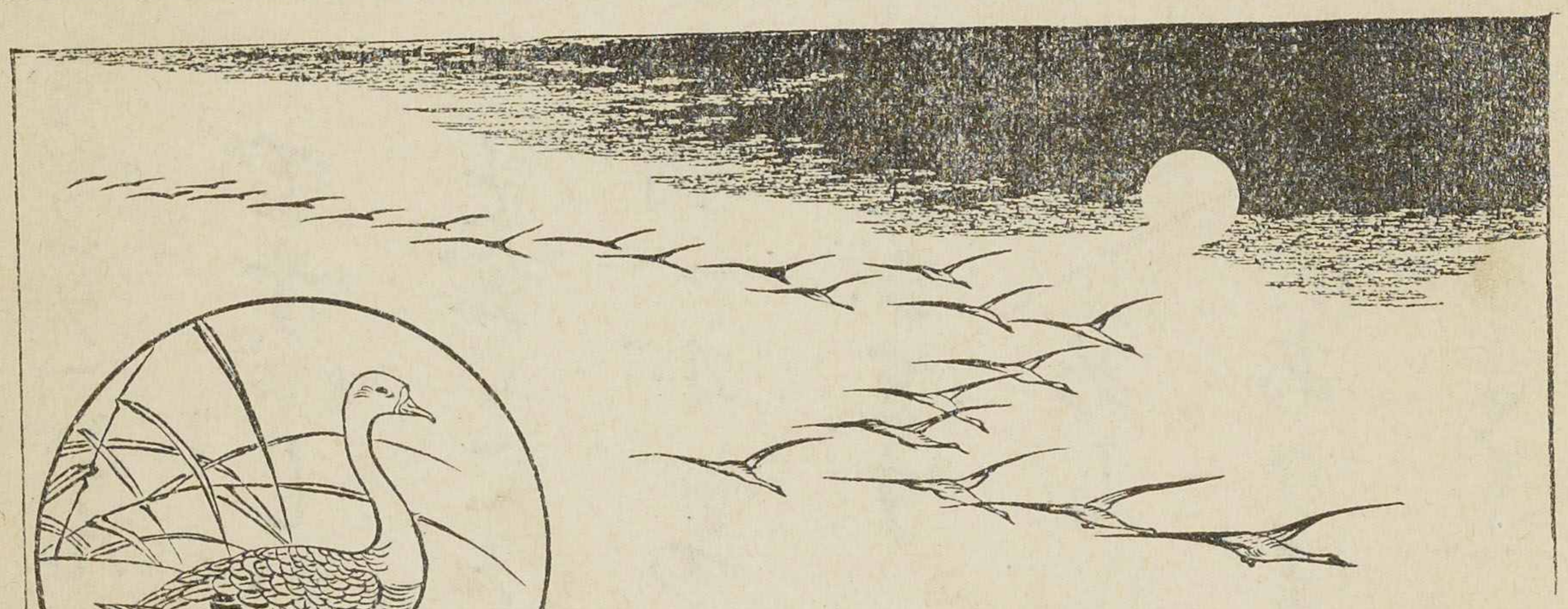
ある 月夜（つきよ）の ことで ございました、こゝ

たろー が、おとうさん と、よそ から、か

空

つってきます　と、そらのほーで、がー!!
がーと、なく　こゑが　きこえました。
こたろー　が、すぐ、空　を　みます　と、と
り　が、たくさん、ならんで、とんでいく　の
が　みえました。
こたろー「おとうさん。あの　とり
は　なんと　いふ　とり　です
か。たいそー、よく、ならんで、





とんでいきますね。

おとうさん「あれは がんと いふ とりです。がんは、いつも、あのよーに、ぎょーぎよく、ならんで、とんでいきます。」

こたろー「がんと いふとりは どんな とりですか。」

羽

おとうさん「がん　は　あひる　に　にてゐる　とり
です。しかし、あひる　は、およぐだけ　で、
とぶ　こと　は　できません　が、がん　は、
羽　が　つよい　から、あの　よーに、よく、
とびます。そして、また、あひる　の　よーに
に、あし　に、みづかき　と　いふ　もの
が　あります　から、池など　に、おりる
と、よく、およぎます。」

おとうさん　は、　かう、　いって、　また、　つぎ　の
よーに、　いひました。
「この　とり　は、　あたたかな　ところ　と、
たいそー、　さむい　ところ　と　が　きらひ
です。　それですから、　このごろ　の　よーに、
すずしく　なると、　よそ　の、　たいそー、
さむい　ところ　から、　きます。　そして、　あ
たたかく　なって、　つばめ　が　くる　よー

に なる と、また、よそ の、すずしい
ところ へ、いってしまひます。」

だいれ ねこ のめ。

おうめ「一郎さん。おもしろい こと をして
あそびませう。おまへ は めくらに お=
なりなさい。ねえさん・は せんせいに に
なりませう。」

一郎「それ では、わたくし は 目 を ふさぎ=

ませう。」

一郎は、えんがはに、すわって、目をふさぎました。おうめは、一郎のひざにけものをのせました。

おうめ「一郎さん。これはなんですか、あ、てごらんなさい。」

一郎は、そのけものの あたまからを まで、よく、なでてみました。

毛色

一郎「せんせい。これは ねこ でせう」。

おうめ「さう です。よく、あたりました。しかし、あなた は、めくら です から、この ねこ の 毛色 の うつくしい こと は わかりますまい。また、目 の 中 の ひ とみ が、あかるい ところ では、はり の よーに、ほそながく なって、くらい ところ では、まるく なる ことなど は

わかりますすまい。めくらの子は、ほんとー」に、かはいさうですね。」

一郎は、きゅーに、目をあけて、見まし」た。すると、おうめのいったよーに、ねこのひとみが、ほそながく、はりのよーに、なってゐました。

一郎はほんとーのめくらでなかっ」たことをよろこびました。

だい十　そーじ。

はうき、ぞーきん、ちりとり　と、
どーぐ、いろいろ、よーいして、
ほこり　はらって、よく、ふいて、
きれいに　なる　まで、
そーじ　を　しませう」。
机、ほんばこ、ふでたて　や、
つや　の　すみずみ　そーじして、

ものを そろへて、かたづけて、
きれいな ところ で、
べんきょ―しませう。」
木の は、かれえだ、かみくづ や、
にはの ちり、ごみ はきとって、
こいし ひろって、水 まいて、
きれいな ところ で、
うんどーしませう。」

日月

だい十一　かどまつのはなし。

わたくしはかどまつでございます。

わたくしは、きょねんの十二月三十一日に、一郎さんの家のまへに、たてられました。その つぎの日からは、新年(しんねん)でございましたから、

石

わたくしは、その　新年（しんねん）の　おいはひに、たてられた　の　でございます。

一月一日に、わたくしの　そばで、一郎さんは　たこ　をあげておいでした。おうめさんは　まり　をついておいでした。

そのうちに、おうめさんの　まりが、石に　あたって、みぞに、ころがりおちました。

一郎さんは、それを　見て、すぐ、たこ

をおろして、かけていって、とっておあげなさいました。

それから、一郎さんは、また、たこをあげようとなさいました。ところが、糸がもつれてゐて、なかなか、ほどけませんでした。おうめさんは、それを見て、すぐ、かけていって、その糸をほどいておあげなさいました。

おうめさん　と　一郎さん　と　は　きょーだい
です。　わたくし　は、　その　きょーだいなか
の　よい　の　を　見て、　たいそー、　かんしん
しました。　そして、　一郎さん　の　家　の　ま
へ　に、　たてられた　の　を、　しあはせ　に、
おもひました。

ダイ十二　マツノ　ハナシ。　(一)

松　ノ　木　ハ、　アヲイ、　ハリ　ノ　ヨーナ

ハヲモッテヲリマス。ソノハハ、タイ〃テイ、二ツヅツ、イッショニナッテ、ツイテヲリマス。

松ノハハ、ホカノ木ノハノヨーニ、色ガカハッタリ、オチタリスルヨーナコトハアリマセン。ソレデスカラ、人ガ「松ハメデタイ木ダ。」トイッテ、カドマツナドニシマス。

アルトキ、林ノ中ニ、小サナ松ノ木ガアリマシタ。タイソー、ジブンノハヲキラッテ、イツモ、「キンノハヲモッテミタイモノダ」。トイッテヲリマシタ。

アルアサ、目ヲサマシテ、見マスト、ハガ、スッカリ、リッパナ、キンノハニカハッテヲリマシタ。松ノ木ハ、タイソー、ヨロコビマシタ。

トコロガ、マモナク、人ガキマシタ。ソシテ、ソノ、金ノハヲ、一ツモ、ノコサズ、トッテイッテシマヒマシタ。

松ノ木ハ、タイソー、カナシガリマシタ。ソシテ、ソレカラハ、「ガラスノハヲモッテミタイモノダ。」トイッテヲリマシタ。

ダイ十三　マツノハナシ。(二)

アルアサ、松ノ木ガ、目ヲサマシ

テ、見マスト、ドノエダニモ、ガラス
ノハガツイテヲリマシタ。ソシテ、日
ガウツッテ、タイソー、キレイデゴザイ〃
マシタ。松ノ木ハ、マタ、タイソー、ヨ〃
ロコビマシタ。
トコロガ、マモナク、カゼガ、ツヨク、フイ〃
テキマシタ。ソシテ、ソノ、ガラスノハ
ヲ、一ツモ、ノコサズ、フキオトシテ、コハ〃

シテシマヒマシタ。

松ノ木ハ、マタ、タイソー、カナシガリマシタ。ソシテ、ソレカラハ、「金ノハヤ、ガラスノハニハ、モウ、コリテシマッタ。草ノヨーナハヲモッテミタイモノ」。トイッテヲリマシタ。

アルアサ、目ヲサマシテ、見マスト、ドノエダニモ、草ノヨーナハガ

ツイテヲリマシタ。松ノ木ハ、タイソー、ヨロコビマシタ。

トコロガ、マモナク、牛ガ キマシタ。ソシテ、ソノ ハヲ、スッカリ、タベテシマヒマシタ。

松ノ木ハ、コヱヲ タテテ、ナキダシマシタ。ソシテ、ソレカラハ、「金ノハヤ、ガラスノハヤ、草ノヨーナハ

ニハ、モウ、モウ、コリテシマッタ。ヤッパリ、モトノ、青イハリノヨーナハガ、イチバン、ヨイ。ドウカシテ、ハヤク、モトノトホリニナリタイモノダ」。トイッテヲリマシタ。

アルアサ、目ヲサマシテ、見マスト、スッカリ、モトノトホリニナッテヲリマシタ。

松ノ木ハ、タイソー、ヨロコビマシタ。ソシテ、ソレカラハ、モウ、「ホカノハヲ モッテミタイ」ト イッタ コト ハ アリマセンデシタ。

だい十四　ゆき。

ある あさ、雨が ふって、たいそー、さむうございました。

そのうちに、雪が ふりだしました。その

ふる　よーす　は、ちょーど、白い　はなびら
の　ちる　よー　で、たいそー、きれい　でし〃
た。
おひるごろに、雪　が　やんで、日　が　てり〃
だしました。
どこ　の　家　の　やね　にも、じめん　にも、
雪　が、五寸ほど、つもりました。木　の　え〃
だ　に　かかった　の　は、ちょーど、白い　花

まをこしらへて、あそぶものもありました。

がさいたよーで、また、たいそー、きれいでした。こどもは、よろこんで、そとに、でて、あそびました。ゆきーなげをして、あそぶものもありました。また、雪だるーて、あそぶものもありー

耳口

しかし、日が、つづいて、てった　のでで、やゝ
ねの　雪　も、じめん　の　雪　も、だんだゝ
ん、きえていきました。また、雪だるま　も、
だんだん、小さくなっていきました。

あの、にはさきの　雪だるま。

耳、目、はな、口　もってゐても、

耳　は　きこえず、目　は　見えず、

にほひ　は　かげず、ものいへず、

それに、手もなく、足もなく、からだは、まるく、こえてゐても、日がてりだせば、やせていく。

だい十五　紀元節。

二月十一日は、紀元節で、おめでたい日でございます。

いま、この日のおめでたいわけをはなしませう。

天皇（まう（もし））　西東

日本の國の、いちばん、はじめの天皇は神武天皇と　まうす　おかたでございます。

神武天皇が、まだ、わが國のうちの西のほーに、おいでになったころ、東のほーに、わるものどもが、おほぜい、をりました。

神武天皇は、このわるものどもをせめ

に、おいでになって、とーとー、まかしておし＝まひになりました。

神武天皇（じんむてんのー）は、このときまで、まだ、天皇におなりになりませんでしたが、そこで、はじめて、天皇におなりになりました。

その日は、ちょーど、二月十一日で ございました。それで、この日を紀元節（きげんせつ）と いって、日本中の人が、みんな、お＝

いはひ　を　します。

だい十六　てがみ。　(一)

おちよ「おかあさん。　その　てがみ　は、どこ　へ、お出しなさる　の　で　ございますか。」

おかあさん「これ　は、にいさん　の　ところ　へ、出す　の　です。おまへ　も、なに　か、かいて　おあげなさい。」

おちよ「わたくし　は、てがみ　を　かいた　こと

もふ
（もし）

が、まだ、いちども、ございません。

おかあさん「なんでも、おまへのおもふことをかけば、よいのです。なにか、おかきなさい。」

おちよ「どんなことをかいて、よいか、わたくしには、わかりません。」

おかあさん「それでは、『きのふのばん、かじがあって、うちもやけてしまひました。』

と、おかきなさい。」

おちよ「おかあさん。そんな　ことは　なぃ　こゝ
と　で　ございます。にいさん　が、ごらんゝ
なさいましたら、びっくりなさいませう」。

おかあさん「さう　です。おまへ　の　いふ　とほり
です。よく、おぼえておおきなさい。手紙
には、ない　こと　は　かく　もの　では
ありません。なに　か、あった　こと　を

おかきなさい。」

だいナセ　てがみ。　(二)

おちよ「おかあさん。ゆうべ、うちの　犬が、たいそー、ほえました。あの　こと　を　か」いてあげたら、どう　で　ございます　か」。

おかあさん「それ　は、ほんとーに、あった　こと　です。けれども、そんな　こと　を　書いて」あげたら、にいさん　は『つまらん　こと

を　書いてよこしたものだ。』と　おもふ
でせう。手紙には、つまらんことも
書くものではありません。』
おちよ「それでは、おとうさんのごびょーき
のなほったことを書いてあげたら、
どうでございますか。」
おかあさん「あー。よく、きがつきました。そ
れでは、

おとうさんのごびょーきは、
もう、すっかり、なほりました。
二月二十日　ちよ
にいさま
と、お書きなさい。」
おちよ「はい。さう、書きます　から、おかあさん
の　手紙　の　中　に　入れて、出してくだ
さい。」

皇后

ダイ十八　神功皇后（ジングーコーゴー）。

神武天皇（ジンムテンノー）ヨリ、スコシ、アトノ天皇ノトキニ、ワガ國（クニ）ノウチノ西ノホーニ、ワルモノドモガヲッテ、タイソーシ、ワガママヲシテヲリマシタ。

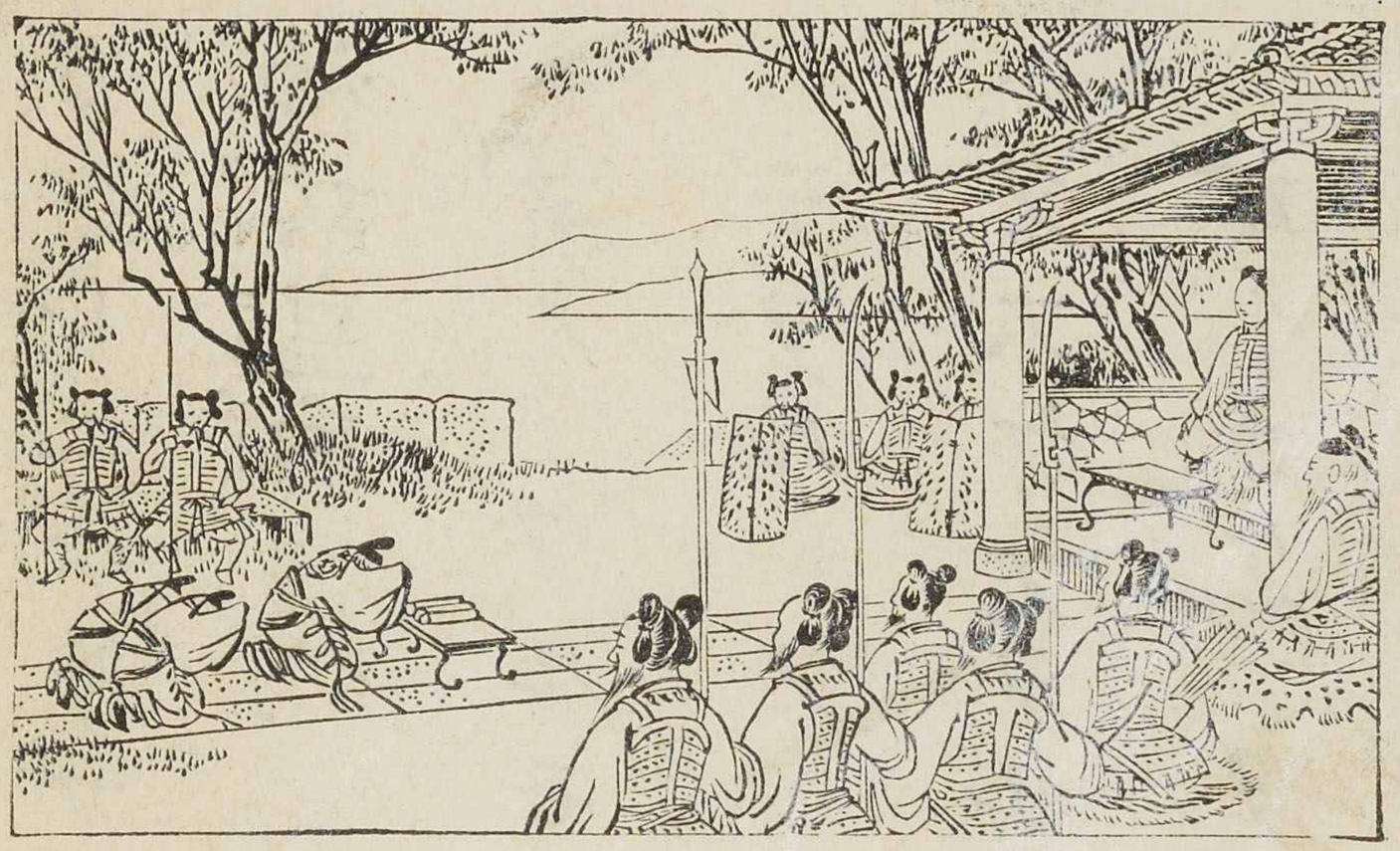
天皇ハ、ソノ皇后ノ、神功皇后（ジングーコーゴー）トマウスオカタト、ソレヲセメニ、オイデニナリマシタガ、センソーチューニ、オ

カクレニナリマシタ。

神功皇后（ジングーコーゴー）ハ、

「コノ　ワルモノドモガ　ワガママヲシテヲル　ノハ、ガイコクノモノガタスケテヲルカラダ。ソレダカラ、ソノガイコクヲセメタラ、コノワルモノドモハワガママヲヤメルダラウ」。

トオオモヒニナリマシタ。



ソコデ、男ノフーヲシテ、ウミヲワタッテ、ソノガイコクヲセメニ、オ=イデニナリマシタ。

スルト、ムカフノ國(クニ)デハ、タイソー、オソレテ、イクサモセズニ、コーサンシテシマ=ヒマシタ。ソシテ、「マイトシ、タカラモノヲサシアゲマセ=

ウ」。ト、ヤクソクシマシタ。

皇后ハ、ソレヲユルシテ、オカヘリニナリマシタ。

ソレカラ、西ノホーノワルモノドモハ、ワガママヲセンヨーニナリマシタ。

マタ、ワガ國(クニ)ノツヨイコトガ、マヘヨリモ、ヨク、ガイコクニ、シレルヨーニナリマシタ。

ダイ十九　奈良（ナラ）ノ　大佛（ダイブツ）。

ミナサンハ、オ寺ニ、イッテ、ホトケサマヲ見タコトガアリマセウ。

ホトケサマトイフモノハ、モト、アルガイコクカラ、オクッテキタモノデス。

ソノガイコクハ、神功皇后（ジングーコーゴー）ガ、セメニ、オイデニナッタ國（クニ）ノトナリノ國（クニ）デス。

ソレカラ、日本デモ、ダンダン、カネヤ木ナドデ、ホトケサマヲコシラヘルヨーニナリマシタ。マタ、オ寺モ、タクサン、タテルヨーニナリマシタ。

コノヱハ、日本デ、イチバン、大キナホトケサマノヱデス。コノホトケサマハ、

カネデ、コシラヘテアッテ、高サガ、五丈三尺アマリ、アリマス。ソシテ、奈良(ナラ)トイフトコロニ、アリマス。ソレデ、奈良(ナラ)ノ大(ダイ)佛(ブツ)トイッテ、タイソー、名高ウゴザイマス。

奈良(ナラ)トイフトコロハ、ムカシ、天皇ノゴテンガアッタトコロデ、コノ大佛(ダイブツ)ハ、ソノコロニ、デキタモノデス。

枝

だい二十　さる。

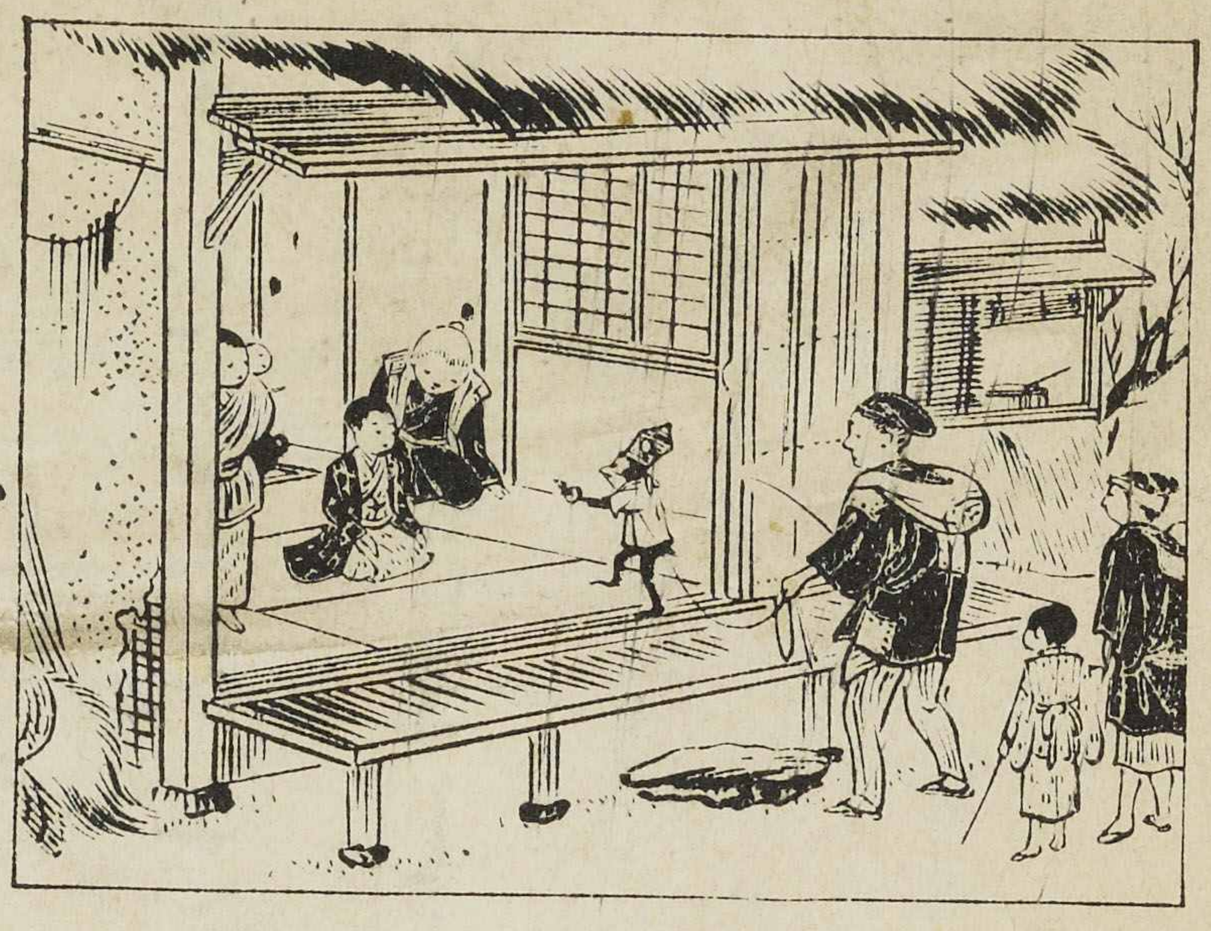
人にはたいそー、にてゐるけも〻さるは、たいてい、山の木の枝のです。たいてい、きのみなどをたべ〻上に、すまってゐて、いきてゐます。

手、足には、ゆびが、五本づつ、あって、足も、手のよーに、ものをも、

にぎることができます。それですから、枝から枝へ、とびまはつても、なかなか、おちません。

さるは、かしこいけものので、よく、人のまねをします。それですから、人がつかまへてきて、いろいろなげいをしこみます。

あるひ、さるまはしが、小太郎の家



に、さるをつれてきました。

そのさるは、えぼしをかぶって、赤いそでなしをきてゐました。さるまはしが、たいこをたたいて、はやし立てゝ、すずをふりふり、まひました。

小太郎は、はじめて、さるのまひを

見たので、たいそう、よろこびました。そして、「ごほーび だ。」といって、さるにいもをやりました。さるは、ていねいに、おじぎをして、さるまはしのせなかにのって、いきました。

72423

国立国語研究所
1000605129

尋常小學讀本卷四
定價金七錢

明治三十六年十一月廿六日印刷
明治三十六年十一月廿八日發行
明治三十七年二月廿一日翻刻印刷
明治三十七年二月廿四日翻刻發行

明治三十七年二月二十日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　三木佐助
大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷
印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衞門町拾六番地

30. 0
24
4